おそろし

三島屋変調百物語事始

第一話　曼珠沙華

一

袋物屋の三島屋は、筋違橋先の神田三島町の一角にある。屋号はこの町名から戴いた。主人の伊兵衛が、笹に袋物を吊るしての振り売りから一代でつくりあげた店だから、他にそれらしい由来はなかった。

またこの三島町界隈は、もともと伊兵衛の商いの縄張でもあった。

江戸には、袋物といえば誰でも知っている名店が二店ある。池之端仲町の越川と、本町二丁目の丸角である。どちらも振り売り風情が気軽に仕入れの伝手をつけられるお店ではないので、伊兵衛には縁がない。が、ふたつの名店が扱う小物や袋物の趣味意匠の違いについては、じっくりと観察を続けてきた。

そうして彼は、越川と丸角のあいだの南北に長い道筋を、よく振り歩いた。いったいに、ああした名も高いが値も高い店を選んで袋物や小物――紙入、羽織紐、巾着や胴乱などを買い求める

客には洒落者が多いものである。それだけの金と暇があるから名店へ来る。これらの店で金に糸目をつけず洒落た品を買い集めることが、道楽息子の戦支度になぞらえられるほどだ。ならば、越川で気に入ったものが見つからなければ、どれ丸角へも寄って行こう、丸角に出物がなければ、越川へ回ってみようとするものだ。よほどどちらかの店に深いこだわりを持っていなければ、いつでも両方を覗いてみるという客だって多かろう。

つまり、ふたつの名店の店先だけでなく、そこをつなぐ道筋にも客はいるのである。そういう数奇者が、道中ですれ違った振り売りの笹竹に、「おや、これは」と思うものを見つけたらどうだろう。ちょっと待て、その品をお見せということになりはしないか。

また数奇者・趣味人は、季節ごとに身の回りの小物を持ち替える。だから春夏秋冬の初物が出回るころになると、伊兵衛は特に念入りにこしらえた品物を笹につけ、この道筋を振り歩いた。彼とてここばかりが商売の範囲ではないから、他所の町も回るけれど、ことこの道筋を歩くときは、けっして安い品物を持っては出なかった。ほかを歩くときとは格段の差をつけた。

品柄にも気を配った。越川は意匠が斬新なことで知られており、対する丸角はおっとりと風雅を愛でる。その一歩手前、その一歩先。越川にありそうでいてなく、丸角で見たような気がするが実際にはない。そんな意匠を、女房のお民と二人、寝る間も惜しんでつくりあげた。

この目論見は、見事にあたった。ある時期、伊兵衛――振り売り当時は伊助だったが――の袋物振り売りは、一種の名物となっていたことがある。笹に金銀砂子をつけて、お筋違えの振り売り往来――と、この道筋の子供たちに戯れ歌を歌わせるほどに、伊兵衛の担ぐ笹竹は豪奢な景色

をつくっていたのだ。この戯れ歌には、伊兵衛の渡る筋違橋に、彼の売り物が振り売りにはふさわしくない高値であることへの揶揄をかけてあるのだが、伊兵衛はまったく気にしなかった。

袋物の振り売りは、ふたつの荷箱に棒を渡して肩に担ぐ形と、笹竹に商いものを吊るして担ぎ歩く形と、ふた通りある。伊兵衛は後者の形であったが、常に荷箱もひとつ背負っていた。通りがかりの客が笹竹の商品に目をとめ、それを買い上げようとするとき、彼はけっしてそれを外して売らなかった。荷箱から同じものを取り出して売った。たとえ一刻でも外風にさらした品をお客に渡しはしない。それだけの値をいただくのだから当然だと心得ていた。それでは無駄だ、ひとつの品にふたつ分の元手がかかるのだからと、懸念する人は多かったが、伊兵衛はそんな無駄など出していなかった。吊るして見本にした方は、ほごしてまた別のものに使えばいい。伊兵衛夫婦にはそれだけの針の腕もあった。手間を惜しまず履物をすり減らし、江戸じゅうの古着屋を回り、呉服屋をめぐって裁ちはずしの端切れを安く買い集めるだけの気力と体力にも恵まれていた。

この地道な努力が花を咲かせ実を結び、ようよう小さいながらも店を構えられるとなったとき、伊兵衛にもお民にも、場所の選定に迷いはなかった。さんざん振り歩き、良いお客にめぐり合ったこの道筋のどこかにしよう。笹に金銀砂子の伊兵衛は、今もこの道筋におりますと、お客様に手早く見つけてもらえなくてはいけない。

本当なら、越川と丸角の、ちょうど真ん中あたりにしたかった。が、なかなかいい貸家が見つからない。めぐり合ったのが三島町の二階家である。ここだとやや丸角寄りになるのだが、斬新

つまり尖った意匠を売りとする越川には、何が何でも越川でなくてはならないという熱心な、言い換えれば頑固な顧客がいる。庇を借りるつもりで店を構えるならば丸角寄りがいいだろう、ということで落ち着いたのだった。

またこの二階家は広かった。ただの袋小物商いには少々余るほどだが、店を構えても夫婦で針を持ち、雇いの職人に手ずから教えるつもりだったこの夫婦には、作業場となる座敷が要ったからうってつけだったのだ。

こうして、三島屋に十年と一年が過ぎた。

店の構えは変わらない。しかし名は充分に通った。袋物なら越川、丸角と指を折って数えあげる江戸の人びとが、三本目の指を折りながら、それでも三島屋を知らぬならまことの数奇者にはあらず、と評してくれるところにまで行き着いたのである。

住み込みと通いの職人が増えたので、作業場は裏通りの別の貸家へと移った。かつて作業場だった座敷は、狭い裏庭に面した縁側に、しばらくのあいだは猫ばかりが憩っていたが、ここ数年は主人伊兵衛が、碁敵を招く折に使うようになった。三島屋のお店がどっしりと落ち着き、頼れる番頭を得て、二人の息子も育ちあがり跡取りの心配もなくなったころから、伊兵衛は碁に親しむようになったのだ。遅くかかった病は重いの常で、これまでは商いばかりが趣味だった伊兵衛の、これは唯一最大の道楽になっている。

商いものの意匠には凝るが、自身はまったくの野暮天だと称する伊兵衛は、珍しく洒落っ気を出して、この座敷を「黒白の間」と名づけた。その命名もまた野暮だと笑いながら、今では立派

なお内儀となったお民も、奉公人たちもいつしかそれに倣い、主人と碁盤を囲む来客がある折は、本日の黒白の間の合戦はいかにと、楽しく噂するようにもなっていた。

そうして、とある年の秋のことである。

咲いて散るものは儚いと、伊兵衛が嫌って花木を植えなかったこの裏庭に、どういうわけかひと群れの曼珠沙華が根をおろし、花を咲かせた。

曼珠沙華。彼岸のころに花を咲かせるので彼岸花とも、花が血のように紅く、よく墓地に咲くので、死人の血を吸っているという謂れから死人花とも呼ばれる。花が落ちてから細長い葉が出るため、葉のないまま妖艶な花を開くその姿の異様さに、幽霊花と忌み嫌われることもある。しかもこの花には毒がある。

そもそも路傍や田畑の畦に生えるものだから、丈夫なのだろう。どこから誰が種を運んできたのか、風に乗ってきたものなのか、気がつけばあの独特の紅い輪のような花が咲いていた。三島屋の者たちは驚き、一様に不吉だと眉をひそめた。今も自ら針を持って抱え職人たちの頭に立つお民を助け、奥を取り仕切る古参の女中のおしまなどは、色めきたって鎌を探したものである。

が、伊兵衛は笑っていた。この座敷は私と碁敵の皆々様との戦場なのだから、彼岸花はむしろふさわしいという。

「どんな謂れの花であれ、縁あって我が家の庭先に根をおろしたのだ。無下に刈り取るのは情がないというものだろう。他所様で嫌われ厭われて、肩身の狭い思いをしている花だから、ほら、あのように気まずそうに固まっているのもいじらしい。このままにしておきなさい」

ひと群れの鼻珠沙華はお咎めなしということに相成った。

さて、三島屋には、ちょうどこの、曼珠沙華が花を咲かす少し前に、奉公にあがったばかりの娘が一人いた。

秋口のことだから、女中の出替わりではない。手が足りなくなって入れたというわけでもない。おちかというこの娘は、歳は十七。主人伊兵衛の長兄の娘、つまりは姪である。

伊兵衛の生まれは川崎宿である。生家は土地でもその名を知られた大きな旅籠であった。とはいえ伊兵衛は三男坊で、家と商いの跡目は長男だから、早々に御府内へと出てきたのだ。ずっと家に残っていても、旅籠の奉公人たちと同じように追い使われるだけでは面白くない。

伊兵衛の長兄は、自身の才覚でお店を持ったこの弟に、一目も二目も置いていた。もっともそれは後付けで、伊兵衛が振り売りであったころには、ほとんど行き来のない間柄であった。親しく付き合うようになったのは、彼が三島屋を構えてからのことである。

伊兵衛は気が優しく、長兄の掌返しに気を悪くする様子はなかった。三島屋が興るのと前後して、何かと長兄の旅籠の商いを助けてきた次兄が病でぽっくりと逝ったことにも、彼は心を痛めていた。兄さんはさぞ心細かろうと、こちらから近づいたのが往来の始まるきっかけになったほどである。

おちかは、この長兄から三島屋が預かった娘であった。奉公というよりは行儀見習いである。ただしこれには、嫁入り前の娘を一度は江戸の水で磨きたいという親心以上の、一抹の事情が絡みついていた。

朝のうちから、今日は黒白の間にお客様があると聞いていたので、おちかは念入りな掃除に取りかかった。旅籠生まれは、子供のころから掃除の手順を叩き込まれてきた。手馴れたものである。

「どんななよなよのお嬢様が来るのかと思ってたのに、おちかさんは働き者だね」

何かと口うるさいおしまも、文句のつけようがなかったのか、すぐとおちかに親しんで、そんな台詞を吐いた。それほどに、おちかはそつのない娘なのである。

名の知れたお店であっても、本陣でもない限りは、旅籠の娘はけっしてお嬢様にはなれない、家の者が奉公人たちと一緒になって、身を粉にして働かなければ立ち行かない商いだから——おちかがそう説明すると、おしまはさらに感心したようだ。

「おちかさんなら、もうどこにも行儀見習いなんかに上がることはないのにね。さては今度の奉公は、あんたのお里のご両親と、うちの旦那様とお内儀さんが語らって、あんたに江戸で良い嫁入り先を見つけようという算段なんじゃないかしらん。きっとそうだよ」

おしまは、おちかが三島屋に預けられることになった事情を知らない。知っているのは主人夫婦ばかりだ。だから、自身も働き者だが、働き続けているうちに良縁を逃がしてしまった感のあるこの女中は、少しばかり羨ましそうにそんなことを言う。一人合点をしているそのふっくらした顔に、おちかは寂しく笑い返した。

「あたしは、どこにもお嫁になんか行きません。ゆくゆくはここでお内儀さんにお針を習って、

袋物仕立ての職人として一本立ちしたいと思っています」

あらイヤだ、誰があんたにそんなことをさせるもんかねと、おしまはまるで本気にしてくれなかった。が、おちかは真実そう思い決めているのだった。もう川崎の実家に戻るつもりはなかったし、どんな良縁が舞い込もうと、誰とも添うつもりもなかった。

きりりと絞った雑巾で畳の目をきゅっきゅとこすり、おちかがふと手を止めると、庭先で揺れている曼珠沙華の花が目に入った。満開に咲いてから今日でもう何日になるかわからないのに、紅い色は褪せることもない。強い花なのだ。

その芯の強さと、裏腹の寂しい風情には、今のおちかの心の奥に触れるものがあった。

——叔父さんが、この花を刈らせずに残してくだすってよかった。

この花の、世渡りの肩身の狭さはあたしと同じだ。おちかは紅い花にそっと微笑を投げて、また畳拭きを始めた。

おしまの推測は、的を外してはいなかった。当初、おちかを行儀見習いではなく、養女として遇することを、伊兵衛夫婦は考えていた。彼らもまた、おちかの心の底までは知らずとも、彼女が実家へ戻れないことを承知していた。ならば江戸でのんびりと、それこそお嬢様暮らしを味わわせ、物見遊山も一緒に楽しみ、然るべく花嫁修業もさせた上で、良いところへ縁付かせよう。とりわけ、息子たちは育てたものの、娘には縁のなかったお民は、おちかと二人、母娘の真似事をするのを楽しみにしていた。一人前になりかけの息子たちは、伊兵衛の言いつけで、他のお店に奉公にあがって商人修業をしているところだから、お民は寂しい思いもしていたのである。

が、おちかはそれを断った。何より、彼女は外へ出ることが嫌だった。有り体に言えば恐ろしかった。人交じりすることも怖かった。ならば、習い事も物見遊山もとんでもない話である。

だからといって、お嬢様然と着飾り、箸より重いものを持たずに、ただ三島屋の内にこもってお雛様さながらに日を過ごしていては、もっといけないことになる。おちかは働きたかった。夢中で身体を動かしたかった。そうしているあいだだけ、心の内に寄せては返す底深い悲しみや苦い後悔、己を責め人を詰る苦しい思いを忘れることができる。

他に身を寄せるあてはなく、仕方なしなし、ごく幼いころに会ったきり顔も忘れてしまっていた叔父のもとへやってくることでさえ、おちかには最初、耐え難い苦痛だった。知らない人びとに交じるのは辛い。いや、知る知らないにかかわらず、おちかには「人」というものがすべて恐ろしく思えてならなかったのだ。

それだからこそ、実家であのような出来事が起こり、家族の皆がおちかの今後の身の振り方に鳩首している折、おちかは仏門に入りたいと願ったことがある。人を恐れ人を厭い、誰にも心を許すことができなくなってしまったこの身を救ってくださるのは、もう御仏だけだと思い詰めていたのだった。

おちかの両親は、真っ青になった。若い身空で何を言う、それだけは諦めておくれと手を取って、おちかもまたその手を取り返し、互いに泣いて泣き暮らしているところへ、三島屋からおちかを預かろうという話が来たのである。

その経緯を、おちかは切々と叔父夫婦に訴えた。どうあってもお聞き入れいただけないならば、

何処へなりと立ち退いて、わたしの望むように追い使ってくれる奉公先を探します、とまで言いい張った。伊兵衛とお民は大い困惑したが、おちかの瞳に宿る切羽詰まった光を見逃すほどのぼんくら者ではないこの夫婦は、おちかの望みをかなえてやることにしたのであった。

以来、おちかは三島屋から一歩も外へ出ていない。日々は女中仕事に忙しく過ぎてゆく。

三島屋ではおちかを迎えてほどなく、それまでおしまの下で働いていた歳若い女中二人に暇を出した。事情は知らないまでも、おちかを気に入り、また主人の意向を汲んでそつなくおちかを遇するだけの気働きを持ち合わせているおしまと二人きりの方が、おちかが楽だろうという思いやりからの計らいだ。またこの二人の女中は、同じ年頃のおちかの身の上がどうにも気になるようで、他愛ないが煩い詮索や噂話でおちかを悩ませることも多かったから、おしまに言わせるならば、

「いい厄介払いだよ」

ということだった。

「もともとおしゃべりでしょうがない娘たちだった。手より口を動かす方が達者な女中なんて、この三島屋には要りませんよ」

未だに越川、丸角には及ばぬこぢんまりしたお店の三島屋だが、それでも奥を受け持つのが女中二人ではいささか手が足りない。が、その忙しさはおちかにとって何より有り難いものだった。

一方おしまは、折節、さすがにこれには気が揉めるらしい。いくら主人夫婦から、

「おちかのことは万事おまえに任せる。本人がめいっぱい奉公したいと言っているうちは、いく

らでも使って躾けてやっておくれ」

と頼まれてはいても、相手は主人の姪である。行儀見習い奉公にはそれなりの格というものがあろう。木っ端女中と同じように追い回していいものか。

そんな疑問が、ふと口をついて問いかけになることがある。ねえおちかさん、あんたそんなに働かなくてもいいんだよ。下働きはあたしに任せて、もっとお店の商いの方のお手伝いをしてみちゃどうだろう。その方が旦那様もお喜びだろうし、あんたなら看板娘になれるもの。

するとおちかは答える。「あたしには客あしらいなんてできません。それに三島屋では、誰よりもお内儀さんがいちばん働いてるじゃありませんか。ご自分で台所に立って賄いをなさり、あたしらに奥向きのことを指図なさりながら、あのお針の腕前の速いこと、見事なことといったら、見蕩れるくらいです」

そうだよねぇと、おしまは引き下がる。そしてまた忙しい時が戻る。おちかは我を忘れて――ではなく、我を忘れるために働き続けていた。

午過ぎのことである。

黒白の間のお客様は八ツ（午後二時）においでになる、石和屋さんのご紹介だが、いや実に手強いお方で――と、伊兵衛が嬉しそうに言いながらお店から奥へ下がってきたと思ったら、その後を追うように、番頭があわててやってきた。

ちょうど伊兵衛のもとへ茶を運んできたおちかは、二人のやりとりを小耳に挟んだ。どうやら、

上のつく顧客から急ぎの頼みごとがあるらしい。先様は使いを寄越し、駕籠を待たせているという。

委細を聞くと、伊兵衛はすぐ人をやってお民を呼んだ。作業場から馳せ参じたお内儀に、

「堀越様で、急ぎご所望の品があるらしい。大事のこしらえだから、おまえも一緒に来ておくれ」

お民はさっと着替えに立った。その迷いのない所作に、まだ商いのことはわからないなりに、おちかは事の重大さを悟った。おそらく、堀越様という上得意はお武家様なのだろう。そこで急ぎのこしらえを求めているというのは、金持ちの商家が三島屋で何か特別なものを誂えたいというのとはまったく違う、差し迫った注文なのだ。

おちかも支度を手伝おうと立ち上がる。と、伊兵衛はそれを呼び止めた。

「支度はおしまに頼もう。それよりおちか、こういうよんどころない次第だから、今日はお客様との約束は反故になる。おまえ、先様がおいでになったらお相手し、よくよく事情をお話しして、私に代わってお詫びしておいてはくれないか」

頼んだよと、おちかが抗弁する暇を与えずに言い置くと、間もなく夫婦で飛び立つように出かけてしまった。

おちかはぽつりと残された。叔父さんの意地悪。あたしにはお客様の相手なんかできないことがわかっているはずなのに。

なのに、どうして。心のなかで口を尖らしているうちに、当の客が着いてしまった。

おちかの心の臓は、江戸に来てからもう二度は耳にした――さすがは火事が華の都だ――擦り半鐘さながらに乱れ打っていた。

二

黒白の間へ、客を案内してきたのは番頭の八十助である。

歳は主人の伊兵衛とおっつかっつ、背恰好も同じぐらいなのに、主人よりどうしてか老けて見え。いつも小腰をかがめてせかせかと前のめりに歩く。今日も、足袋の爪先しか床板につけぬような、その気ぜわしい足取りでやってきた。

「ささ、どうぞどうぞお通りくださいませ」

案内の言葉も忙しない。

お客様が着いたという声を聞くと、迎えに出る前に、八十助は噛んで含めるようにおちかに言った。

「やむを得ない次第があるとはいえ、こちらがお呼び立てしたお客様に空足を踏ませるのは重々の失礼です。お詫びを申し上げ、お茶とお菓子を差し上げるおもてなしに、あたしのような奉公人がお相手したのでは、さらに非礼を重ねることになる。だから旦那様は、おちかお嬢さんにお申し付けになって出かけられたのですよ。お嬢さんは、お身内の方だからです」

なるほど、おちかは大急ぎで他所行きに着替え、髷を撫でつけ簪もさし替えていた。誰も女中とは思うまい。

「旦那様もお内儀さんも、お嬢さんを頼みにしてお出かけになったのです。ですからそのように、白地にうっとうしそうなお顔をなすっちゃいけません」

主人の姪であるが女中でもあるというおちかに、この番頭は、丁寧な口調でしゃべりつつ中身は厳しいことを言うという、二段構えの姿勢をとっている。おちかお嬢さんと呼ばれながら叱られる身としては、なにやら、殷懃だが口うるさい寺子屋の先生に対しているような気分であった。

「でも番頭さん。あたし一人でお客様のお相手はできません」

「ご挨拶ぐらいはできるでしょう」

「そのあと、何を申しましょう」

「お客様のおっしゃることにお返事しておればいいのですよ。誰も、井戸端談義をやれと言っちゃおりません。あたしもおそばについておりますから、ご安心なさい」

八十助に、掌をさしのべて上座の座蒲団を示された来客は、つと足を止めて番頭を見返った。八十助より頭ひとつ背が高い。

何か問いかけたそうな顔つきをしたが、まずはどうぞどうぞと八十助がなおも押すので、膝を折ってそこに座った。羽織も着物も濃い銀鼠色で、ちらりと見えた裾回しは浅葱色だ。そういえば叔父さんも、こういう組み合わせの袷を持っていたような気がする。なかなかに品がいい。

座敷に碁盤は出ていない。下座の側には、座蒲団もなしにおちかがかしこまっている。

「さて、あるいは三島屋さんは、急な御用事でも出来なさいましたか」

察しよく、来客はそう尋ねた。少し嗄れたような、低い声音であった。
八十助がぺたりと平伏し、おちかもそれに倣った。そして八十助が頭を持ち上げる気配を待って、同じようにした。
来客は、伊兵衛よりは五つ六つ若そうで、背が高いだけでなく、痩せた肩の張っているのがえらく目立つ人だった。子供のころには、きっと「えもんかけ」とあだ名されていたに違いない——などと考えていると、八十助が目顔でしきりとせっついている。挨拶しろというのである。
おちかは用意の口上を、のろのろと口にした。わざとではない。こんなふうに角ばって人に会うのは本当に久しぶりのことなので、口が上手く回らないのだ。
目の前の客よりも、急いで覚えこんだ口上をそらんじることの方に気持ちが傾いていた。自然、おちかの目はお客よりも自分の頭のなかの方に向き、瞳が上にあがっていた。
そんなところに——
八十助が、いきなり叫んだ。
「お客様！」
おちかは跳び上がらんばかりに驚いた。あやうく舌を噛むところだった。
見ると、八十助が両腕で来客を抱きかかえている。客の顔からは血の気が引き、閉じた瞼がひくひくと攣っていた。骨ばった身体が大きく傾いて、今にも横様に倒れてしまいそうだ。
「ご気分がお悪いのでございますか？」
おちかもひと膝ふた膝にじり寄って、客の顔を覗き込んだ。額と鼻筋ばかりか月代にまで、冷

や汗が噴き出している。片手を畳につっぱって、くずおれそうな半身をどうにか支えている。
「まことに——申し訳ありませんが」
呼気を絞り出すようにして、彼は言った。目は固く閉じたままだ。
「そこの、そこの障子を閉めてはいただけませんか」
空いた片手で、庭に面した障子をさしている。その手は宙をかくように震えていた。
おちかは素早く立ち上がり、ぴしゃりと音をたてて障子を閉て切った。
「閉めました。これでようございますか」
「確かに閉めてくださいましたか」
眉のあいだに深い皺を刻み、苦しそうに俯いたまま、来客は確かめた。まるで、それが命に関わる事柄であるかのような、厳しく強い問いかけだ。
「はい」
「もう——庭は見えませんね？」
「はい、見えません」
それを聞くと、来客は震えるような呼気を吐き出し、身体を支えていた手を胸に当てて、何度も何度も深く息をついた。溺れかけて、水からやっと引き揚げられた人のようだ。
おちかは八十助と顔を見合わせた。
番頭は、客の様子を確かめながら、そろりそろりと支えの腕を離していく。どうやら倒れずに座っていられるようだ。

「失礼いたしました」
ようやく目を開いて、来客は言った。
「お手数ですが、水を一杯いただけますか」
ただいま――と、八十助が立った。来客は胸元から懐紙を取り出し、額の冷や汗を拭い始めた。手を動かしながらおちかに目を向けると、柔らかな口調で謝った。
「とんだ不調法で、お嬢さんを驚かせてしまいました。まことにあいすみません」
確かにおちかは驚きで呆然としていた。
「何かお客様のご気分を損ねるようなものが、この庭にございましたのでしょうか」
来客はゆるゆるとかぶりを振った。懐紙をしまうと、小さく空咳をする。
「何も――何もございませんのですよ」
「でも、当家の庭の眺めの何かがお気に障ってしまいましたように、わたしには思えました。どうぞご遠慮なさらず、おっしゃってくださいまし。主人伊兵衛から留守をあずかりましたわたくしの粗相でございますからには、きっと伊兵衛に申し伝え、あらためなくてはなりません」
仰々しいほどの言葉が、おちかの口から自然に流れ出た。旅龍商いを手伝っているころには、時にはこういう言葉遣いが必要になることもあったのだ。それはおちかの身についているものだった。
来客は、優しい眼差しでおちかを見た。
「あなたは三島屋さんの姪御さんだとおっしゃいましたね」

「はい、ちかと申します。伊兵衛はわたしの叔父でございます」
「さても良い姪御さんをお持ちだ。羨ましい限りです」
褒め言葉にはにかみたくても、もやもやした不安の方が先に立ち、おちかは頭を下げるのが精一杯だった。いったい、庭の何がいけなかったのだろう？
「何ということもないのです」
来客は、まだ怖々というふうに、閉て切られた障子に目をやった。
「普通の人ならば、何も怖がることなどありません。まあ――人によっては珍しがり、訝ることはあるかもしれないが」
訝る？　庭の景色に？
ため息をついて、来客は苦笑する。
「私も、日頃はこんなことはないのですよ。あれがある場所は、たいてい限られておりますからね。そういうところに近づかないようにしておればいい。よんどころなく近づかなくてはならない折には、覚悟して参ります。しかし今は、出し抜けだったので」
あれ――とは何のことだろう。
「何ぞ趣向がおありで、三島屋さんはお庭にあれを植えておられるのでしょうか」
そこまで尋ねられて、おちかはあっと思い当たった。
「ひょっとすると、お客様がお尋ねなのは、曼珠沙華のことでございますか」
客はゆっくりと、深くうなずいた。

「私はあの花が怖いのです。怖くて怖くてたまりません」
打ち解けた内緒話のような口調だ。だが、ふざけてなどいなかった。真剣だ。
おちかは、あの花がこの秋にこの庭に咲いたことと、刈り取ろうとした女中を伊兵衛が止めたことを、彼に話した。語っているところに、八十助が水を持って戻ってきた。来客は水の入った湯飲みを受け取ると、ありがたそうに押し頂いてから、ひと口、ふた口と飲み下した。
手の震えがおさまってきた。顔色も、だんだんともとに戻ってくるようだ。
「番頭さん、お客様は、曼珠沙華の花がお嫌いなのだそうです」
心配そうに来客の様子を見守っていた八十助は、それを聞いた途端、ちんくしゃに顔を歪めた。
「これはまったく、ご無礼をいたしました」
なにしろ不吉な花でございますから当然です、手前どもも主人に、一時の酔狂や気まぐれで墓場の花を庭に置くなどもってのほかだと諫めるべきでございました——と、早口に言い募り、ぺこぺこと謝る。
「本当に、どうお詫びいたしましょうか。そうだ、この場で手前が刈り取って、退治してお見せいたしましょう」
手鎌を取りに行こうと立ち上がる。来客は、にっこり笑ってそれを止めた。
「いやいや、それには及びません。三島屋の皆さんに、何の粗相もあるわけではないのだから」
「しかし——」
「どうぞ、伊兵衛さんのお留守に、あれを刈るようなことはしないでください。あの花を哀れみ

愛でるお気持ちは、立派なものだ」
おちかは内心、ほっとした。自分の仲間のようなあの花が、無惨に成敗される様を見たくはなかった。
「お嬢さんは、曼珠沙華の花の謂れをご存じですか」
来客はおちかに問いかけてきた。おちかはひとつ、うなずいた。
「謂れをご存じでも、とりわけあの花が不気味だとか、不吉だとか、お思いにはなりませんかな」
重ねて尋ねられて、ちょっと迷った。ここはいちばん、わたしもあれが庭にあるのは気味悪いと思っておりました——とでも答えるのがもてなしというものだろう。
が、おちかがこの家に身を寄せるのを待っていたかのように咲き始め、ひとつが枯れては隣のひとつが開き、朝に夕に、心細く寂しいおちかの目の慰めとなってくれてきたあの花の目と鼻の先で、そんな冷ややかなことを言いたくはなかった。どのみち、放っておいてもあと数日で、すべて枯れ落ちてしまう頃合だ。
「怖くはございません。ただ、寂しくて可哀相な花だと思います」
おちかは正直にそう言った。
「わたしは、むしろあの花が好きなくらいです。叔父と同じょうに、なんともいじらしいとさえ思ってしまいます」
八十助の目が怒っている。ひと目見ただけで気を失いかけたほどに曼珠沙華を嫌っているお方

の前で、何でまたそのお気持ちを逆撫でするようなことを言いくさるのだ、その口は――と、顔に書いてあるのが読み取れる。この番頭は、気持ちが顔に出易い性質なのだった。

「そうですか」と、来客はしんみり呟いた。

空になった湯飲みをほとりと畳の上に置くと、口元をゆるませて、

「娘盛りの、梅にも桃にも桜にも、牡丹の花にもなぞらえられるだろうほどの器量よしでいらっしゃるのに、曼珠沙華の花に心を寄せられるとは、お嬢さんは芯からお優しい方なのですね。いや、思いがけず伊兵衛さんがお留守になすったおかげで、私は三島屋さんの宝を拝見することができました」

今度こそ、おちかははにかんだ。まともに来客の顔を見ることができない。頬がかあっと熱くなった。

「と、とんでもないことでございます。わたしはこの家の厄介者なのです。親元におられず、どこへ行くあてもなく、叔父と叔母を頼って寄宿している身です。せめて女中働きぐらいは務めようと思いますけれど、世間知らずで智恵足らずで、そちらもまだまだ足りません」

おちかは身を硬くして下を向いているので、八十助がどんな顔をしているのか見えない。そりゃまた内々のことをズケズケと言いすぎですと、やっぱり怒っているのだろう。

が、来客は思いがけずよく通る笑い声をたてた。

「花も恥じらう年頃の娘さんなら、はにかんで俯くお姿もまた景色になる。しかし――」

と、一段、声の調子を下げた。

「最初にあなたのお顔を見たとき、たいそうお美しいお嬢さんだが、どこか寂しげな翳があるなと、私は思いました。それは外れていなかったようでございますね」

何とも応じようがなくて、おちかは八十助を盗み見た。番頭も困っている。眉毛がもじもじと上下している。

今の言葉が当惑を呼ぶ代物であることを、来客は承知の上のようだった。詫びるように軽く頭を下げてから、続けた。

「いや、お嬢さんのお身の上を、詮索するつもりは毛頭ございません。失礼なことを申し上げました。ただ――そうですね」

閉て切ってある障子へと、つと目をやった。

「浮き世の憂さも、商いの算盤勘定もひととき忘れて、盤上の白黒合戦に興じようとお訪ねした先で、覚えず曼珠沙華の花に会い、そこにあなたのようなお嬢さんが居合わせたことは、ただの偶然ではありますまい。きっと何かの徴でございましょう」

「しるし――と、おっしゃいますと」

八十助が調子の外れた声で問い返す。来客はこちらを見返った。

「我々小さき衆生のそばにおわします御仏が、この私に、藤吉よ、そろそろおまえの重荷を降ろすがよいと、お諭しになっているのかもしれません。永い年月、私がこの胸ひとつに隠し通してきたものを、語り明かす潮時が来たのだ、と」

しばし時をいただいてよろしいかと、来客はおちかに問いかけた。

「人生の峠の下りにかかった、小商人の昔語りです。曼珠沙華の花を愛おしむようなお気持ちで、お付き合いくださいますかな」

おちかは、ほとんど迷うことなく、はいと答えてうなずいた。今度は八十助の顔を窺うこともなかった。素直に、その話を聞きたいと思ったのだ。

「では、お言葉に甘えまして」

来客は寂しく微笑んだ。

「何故に私が、これほど曼珠沙華の花を恐れるようになったのか、その理由にまつわるお話でございますよ」

そもそもは、もう四十年も昔の出来事ですと、彼は語り始めた。

「後先になりましたが、私は名を藤吉と申します。三島屋さんにはとうてい及びませんが、いく人かの職人を抱える建具商として、ささやかなお店を張る身の上になりましてからこちらは藤兵衛と名乗っておりますが、このお話を語る私は、やはり藤吉でなくてはなりません。

私の父親は、貧しい建具職人でございました。腕のいい働き者でしたが、なにしろ子沢山でございましたから、働いても働いても養う口に追いつきません。父も母も、苦労ばかりの短い人生であったと、思い出すだに切なくなります。

この出来事があったころ、父母はすでにこの世にありませんでした。その前の年に、揃って火事で亡くなったのです。当時私は七つで、どうかするとまだおっかさんが恋しい歳でしたから、

ずいぶんと泣いたものです。しかし、今思えば、せめて両親がこのことを知らずに済んだのは救いだったかもしれません。

私は七人兄弟姉妹の末っ子でございます。上に兄が四人、姉が二人おりました。皆、父母に似て生真面目な気性でして、貧しさにくさることなく、よく助け合って長屋暮らしをしておりました」

そこは――と言いさして、藤兵衛こと藤吉はちょっと躊躇った。

「場所は勘弁していただきましょう。今も多くの人の暮らしているところです。伏せておいてもお話の筋には障りません。これからお話のなかで私が申し上げる人やお店の名も、本当のものとは違います」

はい、結構でございますと、おちかは応じた。八十助はこの場の展開に呑まれてしまったのか、ただ目を瞠っているばかりだ。

「住み着いている人たちみんなが和やかで、貧しいながらも明るい笑い声の絶えない長屋でございました。差配さんはたいそうな頑固者で、怒ると顔がすぐ真っ赤になるので、長屋の子供らには柿爺と呼ばれておりました」

思い出して可笑しいのか、藤吉はくすりと笑みをこぼした。

「私らが、先に住んでいた長屋を火事で焼け出され、親を亡くしたということを、差配さんはよくご存じでした。ですから、特に私らにはよく世話を焼いてくれました。どうにも私らの暮らしの苦しいときにはこっそりお米を分けてくれることもありましたが、施しは善し悪し半々だと割

り切っている人で、物を恵むよりは、働き口をやるのがいちばんの親切だと、いつもはっきり言っていました。八つの私にも、ちょっとしたお使いや薪拾いなどをまめに見つけては言いつけてくれるほどでしたから、年上の兄姉たちは、奉公口を世話してもらって、やがてはおいおいに家を出てゆくようにもなりました。

この出来事は、そういうなかで、末息子の私と、十三歳年上の長兄のあいだに起こったことでございます」

語り手はここでひと息入れた。飛び出した喉仏（のどぼとけ）がごくりと上下する。それを見て、八十助がにわかに目が覚めたようになった。

「これは気がつきませんで。お茶をお持ちいたしましょう」

ぴょんと立ち上がると、黒白の間を出ていった。逃げるような足取りだ。

「申し訳ございません。お話の腰を折ってしまいました」

おちかはやんわり、謝った。藤吉は軽くかぶりを振る。

「番頭さんくらいの歳になると、今さら他人の昔語りなど聞かずとも足りているのですよ。世間のよしなし事を、胸いっぱい腹いっぱい、見聞きしていますからね」

いささかも気を悪くしている風はない。

案の定、八十助は戻ってこなかった。むしろ、おちかにはそれでよかった。落ち着いた。

庭の曼珠沙華も、障子の向こうで藤吉の語りに耳を澄ませているような気がする。